
メカニク **Mechanic**

紅月 空

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

メカニック M e c h a n i c

【Nコード】

N 7 0 9 5 X

【作者名】

紅月 空

【あらすじ】

とある街の小さな整備屋……。

その店では、一人の若き店員が働いていた。

店員のもとに、次々とくる依頼。

その中には、機械なんて関係ないものまで混じっていたりして……？

学園、ロボット、推理なんでもあり。

今日も整備屋「ヤマモト」の、ガレージが開く……。

なるべく週一更新を目指しています。

無理なときは、あとがきでも書きますのでご理解ください。

この物語はフィクションです。

この物語の舞台はこの世界とよく似た別の世界であり、実在もしくは歴史上の人物、団体、国家、領域その他固有名称で特定される全てのものとは、名称が同一であっても何の関係もありません

プロローグ

白い棺桶。 供えられていく花。 涙をながす大人達。

その光景を、少しはなれたところではながめていた幼い少年がいた。

少年は、一人の大人に花をもらい棺桶に近づいた。

そして、棺桶のなかで寝ている老人の顔の近くに供えた。 必死に涙をこらえて。

花を供えた少年は、また少し離れたところに戻り、椅子に座った。

老人の棺桶が、人々に見送られながら火葬場へと向かっていく。

少年はその棺桶を目で追い、そしてうなだれた。

少年は泣かなかつた。 齒をくいしばり、拳をにぎりしめ、

「師匠……」

一言だけつぶやいた。

この少年が、整備屋「ヤマモト」の店長になるのは、8年後のことである……。

プロローグ（後書き）

プロローグなんて短いです。

次回から長いのでお楽しみに！

誤字脱字がありましたらご指摘お願いします。

始まりの朝（前書き）

誤字脱字がありましたら、感想もかねて指摘してください。
よろしくお願いします。

始まりの朝

「なんてこったっ!」

そんな言葉しかでてこないほどに俺は焦っていた。

ほんとに大変な状況なのである。なんてこったなんてこった。

とにかく急がねばならない。俺は、鍵を原動機付自転車にさし、起動させる。

たしか俺がこれから通う高校は原動機付自転車（以下原付）で登校してはいけなかったきもするが（たしかスクールバスで通わなければならなかったはず）仕方ないだろう。入学式で“遅刻”するよりマシだ。

「いくぜ相棒!」

と景気づけにさげび、俺はクラッチを握り原付を発進させた……。

3時間前の5時……

「てください。起きてください」

聞き慣れた声が、俺を眠りの世界から引き出そうとしている。もう朝か。起きないと……、

「起きないなあ……。ええーい、こつだっ」ぐぼほあっ!

突然、鳩尾みぞおちに重い衝撃がくわり、俺は目を開いた。

窓から差し込む光がまぶしい。春の訪れを肌で感じる、美しい朝だった。鳩尾の痛みさえなければ。

「いったたた。もうちょいマシな起こし方をしてほしいんだが……」
「申し訳ございません、レント様。こいつに後で、起こし方をた

き込みますので」

「ええ〜。だってレンちゃんこうでもしないと起きないでしょ？」

俺の質問に、まじめに答えたのはロイ。俺の鳩尾みそおちにダメージを与えたのはアンだ。

こいつらは、俺の家に住んでいて、家事の手伝いなどをしている。

ロイは、短めな黒い髪をしており、眼鏡をかけて黒いジャージを着ている。20代のような風貌だ。

口調は執事そのものだ。別に執事ってわけではないんだが……。

アンは、ショートカットでオレンジ色の髪をしており、こちらは寝間着を着ている。同じく20代のような風貌だ。

口調はだいたいため口だ。誰に対しても。

そして2人は、ちよつと特殊な人間である。

まあ、今はそんなことより、

「よし、朝飯くうか」

入学式にむけて、腹ごしらえしとかなないと。

*

5時半……

朝食は主に俺が作っている。

ロイヤアンに作らせてもいいのだが、2人が作る料理は、いつも同じ味で飽きてくるのだ。

それに、ロイヤアンは日頃からいろんな家事をしてくれているし、できることは自分でしよう、と心に決めている。

そんな俺の今日の朝食は、白いご飯と梅干し一つ。

それに、冷蔵庫のなかの余り物をつめこんだみそ汁だ。
タンパク質が足りない気もするが、今日くらいはいいだろう。

俺は椅子に座り、箸を持った。

「いただきます」

ロイとアンは、洗濯物や掃除をしていて、食卓にはいない。

そのため俺が朝食を食べているリビングは静寂に包まれていた。

静かに黙々と箸をすすめるのもなんなので、俺はみそ汁をすすりつつテレビの電源をつけた。

画面にはアナウンサーがうつっている。どうやら朝のニュースらしい。

この町、「フクチ」のテレビ局は、HITとDEFの2つがあり、今うつっているのはHKTのほうだ。

余談だが、HITという名前の由来は、フクチのテレビHITという意味があるらしい。俺はずっと、テレビHITするよに！、という意味かと、数年前まで思っていた。

余談終了。

ニュースでは、フクチの街で最近騒がれている、ひったくりの報道をしていた。

なんでも弱い女性を狙って犯行を繰り返しているらしい。そりゃ当たり前だな。

ま、俺には関係ねー。

そう思いながら俺は梅干しの種をはき出した。

*

6時半……

たしかスクールバスがくるのが7時半だから、7時には家でないとな。

学校へいく支度を終わらせ、時計を気にしつつ、俺はガレージ内の掃除をしていた。

「レンちゃん。ゴミ捨ててきてくれないー？」

台所のほうからアンの声がした。食器を洗っているのだろう。

「ああ、分かった。行ってくる」

ゴミステーションは、歩いて5分のところにある。

食後の運動もかねて、行ってくるか。

俺は、燃えるゴミの入ったゴミ袋を持ち、ガレージをでた。

まだ6時半なので、人は少なく、街はとても静かだ。

「あつ、そうそう。ひったくりには気をつけてねー」

「ああ、わかった。んじゃいつてくるわ」

別にゴミ袋しか持っていないので、ひったくりもなにもあったもんじゃない。

だが心配させるのもなんなので、一応返事は返し、ゴミステーションに向かった。

*

「ひったくりだー！ー！」

ゴミを捨て、家に帰る途中に、商店街からそんな声が聞こえた。

ひったくり……？

今朝のニュースの内容が頭をよぎった。

犯人は、弱い女性を狙っている……。

そのとき、前の路地から、フードをかぶり、可愛らしい鞆をかかえた男が出てきた。

その男は俺の横を走り去り、そのまま曲がり角をまがっていった。

あの鞆はあきらかに女性のものっぽかった。そしてあの逃げ足……。

…。

「ひったくり犯かつ！」

くそつ、スルーしちゃったっ！

とにかく俺は、いそいで犯人を追った。

だが曲がり角をまがっても、犯人の姿はもう無かった。

「なんつー逃げ足だよ……」

まさかここにもひったくり犯がいたとは。

フクチの街も、案外せまいものだな……。

と、一人思索にふけっているところへ、おまわりさんが一人、前から走ってきた。

「はあ、はあ。す、すいません。怪しい男を見ませんでしたか、げほっ」

「それが、見失ってしまいました。すいません」

「そ、そうですか……。本官も、さっき、話をきいて、駆けつけたんですが、はあ、どんな男でしたか」

「えっと、全身黒い格好で、フードをかぶっていました」

「はあはあ、分かりました。協力ありがとうございます。それでは失礼します。ケホッ」

おまわりさんはそういうと、もときた道を走っていった。体力なさそうなおまわりさんだなあ。

とりあえず、家に帰ろう。

そう思い、腕時計をみると……、

「……7時半、だと？」

というわけで、原付をはしらせているのだ。俺は。

「ひったくり……。あいつさえいなかったら……」

しかし、そんないいわけは通用しないだろう。

とにかく、入学式に間に合わせねば。

俺は、クラッチをさらに握り、原付のスピードを上げた。

始まりの朝（後書き）

今回は、長いあとがきはありません。

期待してくださった方々、申し訳ございません。

別を書くことがないとか、そういうんじゃない（以下略
とにかく、次回予告、始まります……。

次回予告

高校入学初日から遅刻。

そんな不名誉はさげたいレントは、原付を疾走させる。

次回、「メカニック Mechanic」第2話、「旧友」。

タイムリミットの先にあるものは、新たな出会いか、それとも不幸か……。

次回予告制作

者 紅月

編集長アイ「……中二っばい次回予告だな」

旧友（前書き）

11/7 改稿しました。

旧友

「間に合ったか!？」

門の前には誰もおらず、人影も少ない。

遅刻、か？

とりあえず原付を駐輪場にとめ、前から指定されていた教室へと向かう。

クラスは1組。校舎一階に入ってすぐのところだ。

鞆を持ち、俺は教室へと走った。

「……なんだ、間に合ったじゃないか……」

教室には、30人くらいの生徒がいた。

そのなかには、見たことあるような顔も……。

「おお、レントじゃねえか。久しぶり!」

「……小学、中学一緒だったのに久しぶりって……」

こいつは小木野おぎの(以下オギノ)。やたらと俺に馴れ馴れしいやつだ。

「いやあ、まさかお前がいるとはな。高校一緒なら連絡してくれよな、まったく」

「なんでお前にいちいち連絡せねばならんのだ」

「僕たち友達だろお？」

「腐れ縁っていうほうが正しいんじゃないか……?」

「いかん、こいつにはいつもふりまわされっぱなしだ。

「そうだレント、なんでお前こんなに遅かったんだ?」

「はあ?遅刻はしてねえだろ?」

「……もう入学式おわったぞ」

ガラガラッ!

オギノがそういった瞬間、教室のドアが勢いよくあけられた。

「おい、この中に山本レントというやつはいるか?」

「……俺だが？」
「なんだこの人。みたところ先生っぽいが……。」
「生徒指導の佐藤だよ。初日から説教とはお前も大変だな」
オギノが俺の耳元で囁き、十字をきる。

この後、生徒指導室にて、原付の件と遅刻の件について、みつちり絞られた。

地獄の生徒指導室から解放され、俺はよろよとした足取りで校門をでた。

相棒、もとい原付は家に送られたらしいので、帰りはバスで帰るしかない。

もう今日は帰宅する時間らしい。長い説教だった。

「はぁ、ついてねーなぁ」

ついそうつぶやいてしまう。

朝にあれだけのことがあると、昼間は疲れる。

「おーい、レンちゃん」

あ？この声は……

「アザミじゃないか」

「よっ。久しぶりー！」

彼女は乙輪薊おとわあざみ。小学からの友達だ。新しい制服を着、髪をゆらしながら走ってくる。

それにしても、オギノといいアザミといい、久しぶりってことはないだろうに。

「高校同じなのは知ってたけど、やっぱり改めて実感わくね」

「確かになぁ。クラスが一緒じゃないのがおしいけど」

「そっだ。一緒に帰ろうよ、家も近いんだし」

アザミの家は、俺の家から歩いて数分のところにある。

「そうだな。一緒にかえるか」

高校にもなつて、女子と歩いてかえっているのはどうなんだろう。変な噂が流れないようにしないとな。

「そういや、レンちゃん今日怒られてたよね。指導室いくところみたんだけど」

「いや、ちよつとひつたくり犯と一悶着あつてな」

「へえ、私はてつきり、朝に野良猫とたわむれてそのせいで遅刻したからだと思つてたんだけど」

「え、見てたのか!？」

「いや、レンちゃんそんなことがいっぱいあつたから、今日もそうだと思つて……」

アザミのいうとおり、俺はゴミをすてたあと、何十分か猫と遊んでいたのだが。

つてことは、あそこで猫を無視したら、ひつたくり犯にもあわなかつたのになあ。ひつたくり許すまじ。

「いや、それレンちゃんが悪いと思うよ」

いや、今はひつたくり犯のせいにしないと気が済まないのだ。

「そんなことより、聞いてよ。私のクラスにおもしろい人がいてね」

朝から少し疲れていたが、無邪気な幼なじみの楽しそうな声をきいていると、なんだか楽になれた。

「そうだ。ついでだし、レンちゃんの家によっていくよ。アんに話したいこともあるしね」

「……好きにしてくれ」

少し無邪気すぎるんじゃないか？

「ただいまー」

「お帰りなさいませ」「お帰りー」

家に帰ると、ロイは食器洗い、アンはテレビゲームをやっていた。「おいアン、仕事終わらしたのか？」

「終わらせたよー。まったく、子供じゃないんだからね」
アンは最近、ゲームにはまっている。

いつも働いてくれているから別にいいんだけど、少しは自重してほしいものだ。

「おや、アザミさんもいつしよでしたか」

「えっ？アザミンきてるの？ひっさしぶりー」

「おじゃましまーす」

遠慮がちに入ってくるアザミ。ロイはアザミさん、アンはアザミさんと、アザミのことを呼んでいる。

「んじゃ、おじゃましまーす」

「ずけずけとはいってくるオギノ。」

「お前ははいるな！」

「ええ！？」

ふう、ドアをしめるのがすこしでも遅かったら確実に侵入されていた。

「ちよ、おまつ、いれてくれよー！」

うるさいな、近所迷惑だろう。

「レント様、いれてさしあげたほうがよいのでは？」

「そーだよー。かわいそーじゃんー」

「そうそう、いれてあげないと」

「……わかったよ」

3人にいわれてしぶしぶあける。

「いやー、ほんとありがとうな。しっかしいつ見ても広い家だな」
オギノがまたもずけずけとはいり、部屋を観察する。

「オギノ、なにしにきたんだ……」

「いやー、暇だったから、お前らについて行ったんだ」

世間はそれをストーカーと呼ぶ。

「今お茶をいれますね」

「いやいや、お構いなく」

ロイの対応に遠慮するアザミ。

「あ、僕冷たいのでおねがいます」

いれてもらった分際で、注文をつける小木野。

「お前なあ……。少しは謙遜という言葉覚えろよ」

「いえいえ、いいですよ」

苦笑しながらお茶をいれにいくロイ。

昔からかわらんなあ、オギノは。

「あ、私アンちゃんに話があるんだった。少しむこうではなしてくるね」

「え、話？いいね、なんかおもしろそう。レンちゃん、そういうことだから応接間つかうねー」

そういつて、女性2人は応接間にいった。

話ってなんだ……？

「そうだレント、最近噂のひったくり犯ってしってるか？」

「あ？今日の朝であつたぞ」

「まじかよ……」

ホントあのひったくり犯のせいで遅刻してんだからなあ。
許すまじ。

「でさあ、そのひったくり犯まだ捕まってるか？」

「まあそうだな」

「でさでさ！僕たちでそいつ捕まえないか！？」

「はあ？なにいつてんだこいつは。」

「そんなことしてなんになるんだよ」

「街を守るんだ。光荣だろ？」

「……本当は？」

「上手くいったら女子に大人気かな、と」

アホだ。

「そもそも、そう簡単に捕まえられるものかよ」

「だから、“僕たち”で、つていつたる？お前がちよちよいと犯人逮捕できるメカつくつっちゃえはいいいじゃないか」

結局俺頼みかい。

「別に防犯グッズはつくれるが、犯人の目星もついてないのになどさがつすんだよ」

「目星ならついてるんだな、これが」

「また例の情報収集か？」

「もちろんさ！」

オギノは自称探偵をなめるほどに尾行や、情報収集が上手い。探偵つていうよりただのストーカーなきもするが。

「その犯人の家もつきとめた。あとは証拠をおさえるだけ」

「いや、じゃあ警察に連絡しろよ」

「それじゃ俺の手柄にならないだろ？」

街を守るよりも自分の手柄を優先するオギノ。矛盾してるじゃねえか。

「仕方ない。俺も遅刻の憂さ晴らしに捕まえてやるか……」

「よし、きまりっ！じゃあ、来週の日曜に作戦決行だ！ちゃんとメカつくつといてくれよ！」

そういつてオギノはさっさと帰って行った。

用件はそれだけだったらしい。

「あれ、オギノ様はどうなされました？」

「帰ったよ……」

俺はロイがもってきた冷たいお茶を、グイと飲み干した。

また面倒なことをひきうけちまったもんだが、仕方ない。やるならとことん最後まで。

犯人よ、容赦はしないぜ？

旧友（後書き）

後書き、今回も短めです。

というより、長いあとがきは勇字専門なので、そう思っておいてください。

今回、新キャラ2名でましたね。

特にオギノは、もうバンバンだしたいお気に入りキャラですから！
あとアンがゲーム好きなのも、僕のなかでのお気に入りポイントですね。

では、今回はそんなアンさんに次回予告頼みましょう！

街を騒がせる犯人！

それを追うオギノとレント！

レントが作った犯人捕獲メカとは一体！

次回！「機械戦隊メカニッカー！」第4話！

「型式番号01 ビリビリビリック！」

次回もみてくれよな！

紅月「タイトルウ！？どこの戦隊ものだよ！？」

型式番号01 ビリビリリック

「おい、起きろ。授業中だぞ！」

おっと、授業中に居眠りをしてしまったようだ。入学して5日目、居眠りは駄目だな。

「おい、レント。オゾン層が修復されたのはいつだか分かるか」

「2078年、ではないでしょうか」

「……正解だ」

先生はそう吐き捨てる、授業を再開した。

寝ていた俺が答えたのが、よっぽど悔しかったのだろう。

32年前、オゾン層を人為的に作り出す技術ができ、エネルギーがすべて電気となった。

一般常識である。

「レント、居眠りとは珍しいな。問題児扱いされる日も近いぞ？」

授業が終わり、真っ先に話しかけてきたのは、オギノである。

「……お前のせいだということがわからんか」

犯人確保用の機械を作れといったのはオギノである。

徹夜で作ったのだ。少しは感謝してくれ。

「ああ、ごめんごめん。にしても、1日で作るにはすごいな。さすがレント」

「おだてても許さん」

職業柄、機械作りはすぐにできる。

整備屋の名は伊達じゃない。

「とにかく、あさつての日曜日に作戦決行だな。頼むぞ
まったく、人使いの荒い……。」

整備士、それは電気機械が出回っているこの時代には必要不可欠な職業であり、俺の職業だ。

電気で動かすためにより複雑となった現代の機械は、一般人では直せない。

そのため整備士は、今の時代にはメジャーな職業だ。

フクチの街にも、俺を含めて7人いる。

だが、いくらメジャーであっても、誰もが簡単になれるほど簡単な職ではない。

現代に必要なだからこそそれ相応の待遇もあり、その分試験も難しい。

「ライセンス」、整備士をなするのに必要な証。

そして、これがあれば原付、自動車、電車、飛行機などなんでも操縦できる。

15才であっても、だ。

余談だが、俺は日本初にして日本に一人の最年少整備士である。

整備士は経験が大事なので、俺のような若い整備士のところへくる客は少ないのだけでも。

整備士になっただいさつは……、またの機会に説明しよう。

作戦当日である。

集合場所は、犯人の家の近くの喫茶店ということになっている。

アンはアザミと買い物にいったし（この前の相談はそれだったらしい）、ロイにはオギノと遊びに行くと伝えてある。

店番はロイがしてくれるらしい。

俺は、例のメカと必要最低限の荷物を持ち、家をでた。

「待たせたな」

喫茶店にいくと、もうオギノはきていた。

「さて、ここで犯人が出てくるまでまつぞ」

「それはいいが、今日に犯行を起こすのは確実なのか？」

もし今日、なにも起こらなかつたら骨折り損だ。

「心配ねえ。しっかり調べてある」

「……なにがだ」

「犯人は、バラバラの日に犯行を起こしているように見える」

「……違うのか？」

「これをみてくれ」

そういうと、オギノは一枚の小さなカレンダーをとりだした。

なにやら赤い点が記入してあるが、これは一体……？

「これは、犯行日時だ。月、木、土、日といっけんバラバラに見える」

そういうと、オギノはもう一枚同じようなカレンダーをだした。

「そしてこれは、僕が秘密裏に入手した、犯人のバイトのシフトだ」

「ちょっとまで、というと犯人は無職の大人、ということか？」

学生が平日にもバイトをするとは思えない。

「まあ聞けよ。このシフト、休みの日が犯行日時と被ってるんだ」

「つまり犯人は大人のフリーターってことだろ？」

「違うんだな、これが。お前、通信学校って知ってるか？」

「っ！それがあつたか！」

通信学校とは、授業を受ける余裕のない学生が、インターネットを通じて学習をするという高校のシステムだ。

そしてフクチの高校には、その制度が設けられている。

「その制度で授業を受けている生徒で、なおかつバイトをしている生徒を絞り込んでいった結果、あの家の住人が犯人である可能性が高い」

「……どうしてそこまでするんだ？」

女子の目をひきたいからといって、そこまで努力をするようなや

つではなかった。

少なくとも、俺の知っているオギノは。

「えーっとねえ……。気分だよ、気分」

「嘘をつくな。犯人となにかあったのか？」

「なんにもない。それより、犯人がでてきたぞ」

ちっ、タイミングの悪い。

「尾行開始だ」

とにかく今は、犯人を捕まえることを優先しなければな。

犯人（まだ決まってるわけではないが）は少し街をうろろすると、公衆便所にはいった。

「着替えるつもりだな」

オギノの言ったとおり、犯人らしき男がフードを被って出てきた。

俺がみたひつたくり犯そっくりだ。

「間違いねえな。見たような服装だ」

「よし、尾行するぞ」

そのまま尾行を続けていたが、犯人はある場所で立ち止まった。

「おい、なにしてるんだ？あいつは」

「デパートの前の噴水……か。カモを探してるんだろう」

「なあるほど」

犯人はここから動くつもりはないみたいだ。

「犯人が動いたら、確保してくれよ」

「わあってるよ。徹夜でつくったんだ。無駄にしたくない」

俺はそっぴいなながら、鞆から確保メカをとりだした。

さあ犯人、いつでもきやがれ！

「全然行動を起こさないぞ」

「ばれてる訳じゃねえよな」

待機を初めてもう1時間近い。

今日はなにもしないんじゃないだろうか。

そう思い始めたときだった。

「あれ、アンさんとアザミじゃないか？」

オギノが驚いたようにつぶやく。

ほんとだ。デパートからでてきた2人組は、まぎれもなくアンとアザミだった。

買い物をしていたらしく、鞆を2つひっさげている（紙袋は資源がもつたないと、今の時代では使われていない）。

買い物ってこれのことだったのかと、どうでもいい推理をする。

「おい！犯人が動いた！」

どうでもいい推理をしている時に犯人は立ち上がり、歩き出した。

アザミたちに向かって。

「まさか、じゃないだろうな」

オギノがつぶやくのと、犯人が走り出したのが同時だった。

「そのまさかみたいだなっ！」

俺はすぐにメカを構え、犯人に照準をあわせる。

「ひったくってからにしろよ！」

オギノの忠告をきき、俺はのばしていた人差し指をトリガーにかける。

そして……、

「今だっ！」

犯人が、アザミの持っていた鞆を片方だけひったくった瞬間、俺はトリガーを引いた。

俺のもっていたメカから発射された“それ”は、犯人の背中にぴたりとくっついた。

「電流オン！」

もう一度トリガーをひくと、角をまがろうとしていた犯人が体を

ビクツと震わせ、転倒した。

「ナイス！」

オギノはそう叫び、犯人をの手をロープでしばった。

「型式番号01ビリビリビリック」、それがこのメカの名前だ。

形はモデルガンだが、発射される弾は特殊で、障害物にあたるとくっつくようになってる。

そして、もういちどトリガーをひくと、弾が装填されると同時に、くっついている弾のスイッチが作動し電流が流れる、そういう仕組みとなってる。電流は、一般男性が気絶するレベルのものであり、たいした危険はない。

とにかく、一件落着か。

ふう、とため息をつき、通行人も状況を飲み込みだしたそのとき、「全員動くなあ！」

なんだっ！？

声のした方向を見ると、背の高いがっしりとした男が、女性ののど元に刃物を突きつけている。

しかもその女性が、

「アンじゃねえか……」

落胆したように呟いたのは、アンの窮地きふじを嘆いたからではない。

……第2の犯人の運のなさを思ってたことだった。

そもそも共犯者がいることぐらいは調べておいてほしいものだ。

オギノのほうを見ると、やれやれ、といったいで首をすくめている。

「おいっ！そこの坊主！何をしたかはしらねえが、俺にその銃を向けてみる！この女の命はねえぞ！」

「銃ではありませんよ。発射式スタンガンです」

「んなこたどつちでもいいんだよお！」

やれやれ、うるさい男だ。

「おっ！レンちゃんじゃん！」

こちらに気づいたのか、アンのんきに話しかけてくる。

「うるせえぞ女！黙ってる！」

「うるさいのはあんたよ、バーカ」

「黙れえ！」

男はさらに刃物をのど元につきつける。

「こまったなあ。レンちゃん、助けてよお。ぷりーずへるぷみー」
全然困っていないなさそうな声色である。

「女あ！」

犯人がとうとう爆発し、刃物をアンの腹に突き刺した。

周囲から、悲鳴があがる。

そして、刺された場所から血が……、でなかった。

否、刃物は根本からぼつきりと折れ、地面に落ちて、カアンとむなしいおとを響かせただけだった。

「いやあ、ごめんねえ。実はあたし……」

アンは、呆然としている犯人の手首をつかみ

アンドロイド
「人造人間なんだ！」

背負い投げの要領で、犯人を投げ飛ばした。

犯人は腰をしたたかに打ち付け、うう、とうめく。

その隙をねらい、俺は犯人にむかって銃口を向ける。

「チエックメイト、ですね」

そのセリフ僕が聞いたかったのに、とオギノが愚痴りながら、
第2の犯人もロープで簀巻きにする。

本当の一件落着のようだ。

しかしここまでの騒動になるとは思ってたなあ・

事情聴取とかもありそうだ。面倒くさい。

しかし今考えるべきは

「レンちゃん、どういうことか説明してもらおうよっ」

目が笑っていないアンをどう納得させるか、ということだった。

型式番号01 ビリビリリック(後書き)

次回、アンとロイの秘密が明らかに！

アンドロイド

アンの説教、マスコミの質問、テレビ取材と日曜日は完全につぶれてしまい、俺は陰鬱な気持ちで学校へと歩いていった。

オギノがいいいださなければ、とは考えないようにしている。

正義にリスクはつきものなのだ。

だが、クラスメイトからの質問攻めをどうしのぐか、それを考えなければならぬことが、俺にとっては一番辛いことだった。

アンとロイはアンドロイドである。シヤレではない。

2人は、師匠が二十歳のころに作ったらしい。

つまり2人は60年近く生きていることになる。

人工知能を持ち、地下のスーパーコンピューターと連動することで、ほぼ人間と同じような動き、発言をする。

とはいっても、作られた当時は感情を持っていなかったらしく、月日を重ねる事に人間らしくなっていくらしい。

街の人は、2人のことをよく理解し、一個人をして扱ってくれている。

そしてこの2人は、師匠が作った最初で最後のアンドロイドだ、つい最近まで思っていたのだが

「こいつは……」

「師匠からの、最後の誕生日プレゼント、ですよ」

4月8日、俺の誕生日……、すっかり忘れていた。

俺は今、アンとロイと共に地下室にいる。

案の定、学校で質問攻めにあい、やっとの思いで帰宅したところを、アンロイに呼ばれたわけだ。

この地下室、今はなき師匠の作業場で、俺は初めてはいることになる。

しかし、俺が驚いたのは、地下室に入れたことに対してではない。俺たちの前には、大きな筒状の水槽のようなものがあった。

そしてそのなかには、小さな女の子のような物体が浮かんでいた。

「……これは？」

「ちょっと待つてください、ドロイドの秘蔵ファイルにアクセスします」

ドロイドとは、二人を動かすもとなっているスーパーコンピューターの名称である。

ロイはドロイドにアクセスして、この物体の正体を検索しているらしい。

しかし、検索する必要があるということとは、アンとロイはこの物体について教えてもらっていないのか。

「……見つかりました。ご主人様からの手紙もついていますね。読みましょうか？」

「頼む」

師匠からの手紙、一体なにが書いてあるというのか。

「レントへ。今この手紙を読んでいると言うことは

今この手紙を読んでいると言うことは、俺はもう死んでいることだろう。」

アンとロイは元気か？ アンドロイドが作れる人物は、もう世界では数少ない。

もし2人が動かなくなったら、葬式はあげてやれ。

さて、本題だ。

その少女は、俺の人生で最後のアンドロイド、「ペル」だ。

お前を拾ってから、お前に生きるための技術はすべて教えてきたつもりだ。

だが、お前に大きなプレゼントはあげられなかった。

だから俺は、お前に“妹”を渡したい。
考えてみれば、アンとロイは年上だからな。
ペルにはアンとロイのデータを生かして、最初から感情は入れた
つもりだ。

だが、サンプルが小さな少女だったから、必然的に知能も幼くな
っている、

アンドロイドに人間のDNAが使われていることは教えただろう？
そしてペルにはお前の好きな要素も入れてある。
大事にしてやってくれよ。

そして最後に言っておきたい。

お前を拾ってから、俺は人生が楽しかったよ。

お前は、俺の息子だ。

じゃ、お別れだな。人生を精一杯生きろよ。

山本 源^{ゲン}より、これで終わりですね」

「レンちゃん……」

「……師匠らしいな。俺が“息子”か……」

だが俺も、あんたのことを親父だと思ってたよ……。

「安らかに……眠ってくれ」

あの葬式でいえなかったことが、今なら自然といえた。

だが涙はあの日に出し切った。俺は前を向いて、精一杯いきるの
みだ。

「よし！ロイ、ペルを起動させてくれ！アンはバックアップを！」

「了解しました」

「オッケー！」

親父、誕生日プレゼント、ありがとうな。

アンドロイド（後書き）

少し短いですが、許してください。

テストとかぶり、思うようにスラスラいけなかったのです。

次回、ペルが起動する……。

お楽しみに！

猫耳アンドロイド ペル

「んむう、にゃいん」

ペルが起動してからの第一声がそれだった。

ペルは眠たそうに起きあがり、首をかしげると右手で目の辺りをこすった。

その仕草はまさに「猫」、であった。

いや、仕草だけではない。

ペルの頭には、

「猫の……耳？」

「ネ「ミミ」だ！」

「……猫の耳ですね」

そう、ペルの頭には「猫の耳」がついているのだ。

俺とロイの口から、驚きの混じったつぶやきが漏れる。

そしてアンはというと、

「きゃあー！かわいい！すりすりしたいー！」

ペルの顔に頬をつけてすりすりし始めた。

ペルは見た目は小さな女の子で、猫の耳がついていて、アンがかわいいというのも無理はない。

しかもよくみたら尻尾までついてる……。

しかし、師匠がいていた要素って、これのことだったのか。

確かに俺は、猫が好きだが……、

「これは……反則だな……」

おもわずうなってしまう。それぐらいかわいい。

「にゅう、痛いよお」

ペルはそういって、アンを押しつけた。

体格が2倍ほど違うのにアンを押しつけるほどの力をもっているのは、やはりアンドロイドなのだな、と納得する。

「……おにいちゃん？」

ペルが小さく呟く。

「……おれ？」

「おにいちゃん!」

ペルが抱きついてくる。

かわいい、嫌ではない、が。

うぐうつ、力が強い……。首を圧迫されているっ……。

「こら、ペル。そんなに力強く抱きついてはいけませんよ?」

「……はあい」

ロイに怒られ、しぶしぶ離れるペル。

アンドロイドは学習機能があるから、もうあんなに強く抱きついたりはしないだろう。

それにしても……、

「かわいい、な」

「だねえ」

アンが隣で、うんうん、とうなずいている。

「マスターも粹なことしてくれるじゃん。これで我が家にアイドルが増えたね!」

「だな」

しかし、ペルの世話は誰がしようか……。

ピンポン。

「おっと、誰か来たみたいだな」

「そうですね、そろそろ上にあがりましょうか」

「おにいちゃん、まってー」

地下室をでると、ドアはまたロックされた。

たぶんもう開くことはないのだろう。

「さよなら」

俺は一言そう告げて、階段を上った。

「おじやましまーす、ってあれ？誰、この子」

来訪者はアザミだった。

アザミはペルを見て目を丸くしていたが、俺の説明を聞くと納得して、ペルの相手をしていた。

「そうそう、誕生日といえば……」

ん？ なにやらアザミが、持ってきた紙袋を探っている。

「じゃじゃーん！ レンちゃんに誕生日プレゼント買ったんだ！」

「おお、ありがとう！」

袋からさらに小さな袋をだして、見せびらかしたアザミ。

もしかして、この前の買い物はそれだったのか。

伏線回収だな。

「で、それなに？」

「むっふっふー、まああけてみてよ」

「はあ、なにになに？」

袋を手渡され、開いてみる。

本のようだ。

「まさか……、これって……」

「そう！ おすすめライトノベル10巻！ あと作業用にジャズの

CD3枚！」

このライトノベルは、アンが探してきたのだろうか。

どれもおもしろそうだ。

ライトノベルはいろいろと思い出があって、アザミとの話のネタにもなっている。

そして、こちらは昔のジャズを集めたCDが3枚か。

ジャズはお気に入りだから、普通に嬉しい。

「ありがとつな、アザミ」

「いいよお礼なんて。誕生日にプレゼントは当たり前でしょ？」

アザミはそういって、ペルをだっこした。

「ああ！アザミン！私にもだっこさせてえ！」

「やー！ペルこっちのお姉ちゃんがいいー！ぺったんこお姉ちゃん
いやー！」

あ、ペル……、いつてはならんことを……。

アンのほうを見ると、案の定落ち込んでいた。

「ぺったんこ……、なりたくてなったわけじゃ……、マスターのせ
いなのに……」

ロイは、やれやれ、といった様子で首をすくめている。

そんなことなどお構いなしに、ペルはアザミから離れて自分のし
っぽを追いかけてぐるぐる回っている。

「そつだ、ここにくる途中にオギっちに出会ってこれ私といってくれ
つて言われてたんだけど」

オギっち、とはオギノのことだ。

「プレゼント、か？」

アザミが渡してきた小さな包みには、猫のキーホルダーがついて
いた。

「オギっちってこついうときだけ恥ずかしがるよね。直接渡したら
いいのに」

アザミが笑いながら言った。

オギノかあのプレゼント、か。

昔はそんなの渡してこなかったのになあ。

「ペルー。こつちこーい」

「んー？なにー？」

ペルがちよこちよこと走ってきた。

「このキーホルダー、ペルにあげるよ。俺の友達からのプレゼント
だ」

「わー！猫さんだー！」

ペルは猫のキーホルダーを大事に抱えて走り回っている。自分も猫なんだけどな。

「いいの？ レンちゃん。オギっちがくれたものでしょ？」

「こっちのほうがおギノも喜ぶさ」

それにペルが喜んでるのを見たら和むからな、とはあえて言わなかった。

「そうだ！ 散歩にいこうよ」

「散歩、か。いいな、ペルも外で遊びたいもんな」

「そと！？ いくいくー！」

やはり猫は外が好きなのだろうか。

散歩を提案すると、ペルは目を輝かせた。

「お兄ちゃんっていうよりお父さんだね」

アザミはそういった後、なぜか顔を赤らめてそっぽを向いた。

なんでだろうか。まあ気にしないでおう。

「よし、いくぞ」

俺はペルを肩車し、玄関をでた。

「わーい！ たかいたかーい！」

「おいおい、あんまりはしゃぐと落ちるぞ？」

「たぶん猫だから大丈夫なんじゃない？」

そんな会話をしながら、その日はゆっくりと過ぎていった……。

次の日、俺にロリコン疑惑が流れ、またクラスメイトから質問攻めにあつたことは、別の話だ。

猫耳アンドロイド ペル（後書き）

ペルが少し幼すぎかな、と思いましたが、このままで。
次回は、また話が変わり事件がおこります。
お楽しみに！

番外編 オギノの秘密 (前書き)

入学式より前の話となっております。
主人公はオギノです。

番外編 オギノの秘密

僕はオギノ。毎日をエンジョイ中だ。

彼女はいるがその気になれば何人だって作れる……はず。

ごほん、とにかくそんな僕は今、散歩中だ。

いや、詳しくいえば仕事だ。

僕はこうみえて「探偵事務所」で働いているのだ。

このことを知ってるやつは、僕の周りにはいない。

そして、僕の今の仕事はというと……、

「つかしーな」。ここら辺だと思っただけどなあ」

逃げた猫の搜索である。

探偵事務所のトップ、つまり所長が僕に投げた仕事だ。自分でや

れよ、あのおっさん……。

所長の顔を思い出し、むかつ、とした僕は足下の小石を蹴り飛ばした。

つて、いるじゃん猫！

僕は運がいい。蹴った石が自動販売機にあたって、下にいた猫が驚いて飛び出てきたようだ。

ついでに自動販売機の防犯ブザーもなりだしたが。

「だれかー！ 自販機荒らしだー！」

そう叫んでおき、僕は猫を追いかけた。

「んじゃ所長。僕帰るんで」

「おおそうか。また来週も来いよ」

猫を依頼主に渡して事務所に戻り、社交辞令の挨拶をかわして僕は事務所を出た。

久しぶりに楽な仕事だったかもしれない。

「さあて、帰ってゲームでもすつかない」

そうつぶやき、帰路をたどろうとした僕だったが、家の近くの公園で少女が泣いているのを目撃してしまった。

なんか事件の予感だな……。

これが少年ならさけて通るのだろうが、少女であることもう日が落ち始めたこともあり、俺は声をかけることにした。

「どうしたんだい？」

少女、というよりは女の子といったほうが正しそうな年齢だ。

ロリコンな訳ではないが、女性に対しては放っておけない僕は、優しく声をかけた。

「ひつく、ひつく……。えっとね……。私の大事な鞆がとられちゃったの……」

「……どういふふうにだい？」

「私が横に置いて遊んでたら、お兄ちゃんくらいの男の人がもってっちゃったの……」

ひったくり、に近いか？

怪我をした、とか、物をなくした、とかそういう悩みなら解決してはあげられるが、他の人物、ましてや高校生くらいが関わっているととなると、俺一人での解決は難しい……。

しかも最近、この街に過激なひったくりがいるとも聞く。

……よし。

「おにいちゃんがその鞆取り返してあげるよ」

「……本当？」

「ああ、任せとけ！」

俺はその女の子の住所を聞き、事務所へと戻った……。

その2週間後、ひったくり犯は捕まることになるが、それはまた別の話である。

番外編 オギノの秘密 (後書き)

短くなりすいません。

一週間に一本更新だから短いわけではないので覚えておいてください。

とても長い後書き、書きたいのですが批判もありそうで怖いです。書いてもいいよ、紅月と編集長の漫才みたい、と言う人は感想で書いていただければ書きますので(そんな物好きな方はいらっしやらないでしょうが)。

誤字脱字などがありましたら、ご指摘お願いします。

部活動は相性で決めるべし

5月、俺達の高校ではあるイベントが行われていた。
部活動勧誘だ。

たいした成績があるわけでもない高校だが、勧誘には力が入っており、中庭は部活動紹介の看板や上級生でこった返していた。

だが、いつもはただの人混みにしかみえないそんな中庭の風景も、今の俺にとっては重要な場所だった。

というのもさきほど担任教師から、

「部活動には一応はいつてもらうという校則があつてだな。

つまりなにをいいたいかというと店も大事だが部活には入れ、
ということだ」

などといわれたのだ。

しかし、はいるならば一応顔をだすぐらいはしておかないと、学校での評判だったり（現段階ではロリコンというあだ名がとおつてるらしいから手遅れかもしれないが）先輩とのつきあいだったりいろいろなややこしくなる。

そんなこともあり、俺は部活にはいるかを見極めなければならなかった。

（運動、は性に合わないし……。かといって文化部もあまり好みではないし……）

とりあえず、相談でもするか。

「レントが部活、ねえ……」。

僕からいわせてもらうと、お前ができる部活はこの学校には少ないな」

「そんなことは分かっている。

それよりオギノは部活なにはいるんだ？」

「僕は漫画研究部。なんたって部員のほとんどが幽霊だからね。休

んでも大丈夫なんだよ」

こいつに聞くんじゃないかった。

「レンちゃんが部活……。なんか凄いね！」

「いや、感想よりアドバイスを……。」

「私からいえることはない！」

アザミはそういうと、吹奏楽部の部室に走っていった。

というわけで。

「なあ、俺にあいそうな部活って分かるか？」

俺は最後の頼み、ロイに頼むことにした。

「レント様はなににはいつでも大丈夫ですよ。自信をもってください
い」

「いや、なるべく店にはでれるようにしたいし、そういう点もふま
えてなににするか」

「店のほうは大丈夫ですよ」

へ？、と聞き返した俺のほうを向かず、ただ洗濯物をたたみなが
ら話し続けるロイ。

「レント様には普通の高校生活を送って頂きたいのですよ。」

これはアンも同意です」

「でも、ロイとアンに負担が」

「私どもはアンドロイドです。もとは作業用ロボットの発展にすぎ
ません。」

仕事を与えてもらえるなら本望ですよ」

もっとも、アンは他の楽しみも見つけているようですが、と失笑
しながら手を休めないアンドロイド。

だが、俺にはロイがアンドロイドにはみえない。

もはや彼らは「人間」だ。これは人間の「心遣い」だ。

「ロイ……」

「まだ決められませんか？」

「ならこれはどうです」

ロイが学校紹介のパンフレットに記入してある部活動名を指さす。

「サバイバルゲーム部……？」

「なかなか面白そうじゃないですか？」

「ニヤリ、と笑いながらまた洗濯物をたたみだすロイ。

サバイバルゲーム、というのは銃を打ち合うゲームで、最近ではスポーツ感覚でも楽しめるようになってきた競技である。

銃は実弾ではないので安全であり、最近では科学を生かしたコンピュータによる当たり判定など“伸びてきた”競技であるといえる。

「だが……、

「それは俺の過去を知っていて勧めているのか？」

「知っているからこそ、ですよ。過去など忘れて生きてください、という私のエールみたいなものです。」

「……ご不満でしたか？」

「いや、そんなことはない」

むしろ歓迎だ。俺の技術を最大限いかせる部活動じゃないか。

「ありがとうよ、ロイ」

「いえいえ。」

実はマスターもこれを願っていたのですよ」

マスター、というのは今は亡き師匠のことだ。

しかし師匠も俺の過去にけじめをつけると、そう思っていたのだろうか。

「……分かった。サバイバルゲーム部に入るよ」

「頑張ってください」

これが、俺の高校生活、いや、人生を変える重要な分かれ道だったことは、後に分かることになる。

部活動は相性で決めるべし（後書き）

週一更新が遅れたことを深くおわびします。
実はネットがつながらなかったのです。

次回はサバゲー部の全容についてです。
お楽しみに！

よいクリスマスを！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7095x/>

メカニック Mechanic

2011年12月24日12時47分発行